

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『サイキッカー亜美』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



竹井の巫美

大熊狸喜
表紙 / なえなえ

登場人物紹介

Characters

あいざき あ み

愛崎亜美

家系に秘められた超能力に目覚めた少女。その力を正義のために役立てようと決めている。

キーンコーンコーンコーン。

今日の授業が終わると、楽しい放課後だ。生徒たちの顔が開放感でワッと輝く。

野球部やサッカー部、バレー部や文芸部や囲碁同好会など、部活に向かう少年少女と帰宅部の男子女子などで、学園は一番の賑わいを見せる時間だ。

公立赤葉台学園高等科。ドコにもある風景の一角で、人知れず小さな事件が起こっていた。

滅多に人の来ない薄暗い校舎裏で、三年生の不良少年二人が、一年生の男子生徒にカツアゲ行為をはたらいているのだ。それぞれの学年は、制服の校章の色でわかる。

大柄でゴリラみたいな顔つきの不良上級生たちが、眼鏡をかけた小柄で痩せた弱そうな下級生を脅している。

「オイ、オメーのカネ寄越せってんだろ！」

「だ……だってこれは、参考書を買うお金で……」

オドオドと憚い抵抗を見せる一年生。対してイラついた不良たちは、実力行使に打って出た。

眼鏡男子の襟首を掴むと、堅い拳を目の前で見せ付ける。

「モノわかり悪りーなお前。なら、力尽くで貰うわっ！」

「ひいっ！」

大きな拳が少年の顔面にヒットしたと思われた瞬間、一年生を掴んでいた不良たちの身体だけが、背後に向かって凄いい早さで吹き飛ばされた。

「おわっ、何だ何だっ!？」

まるで、見えない巨人の手で引つ張られたかのように、上級生たちの身体が宙を滑る。

「え……ええ……?！」

怪現象で呆気にとられる眼鏡少年。

四メートルほどの頭上では、二人の不良がドーンと強く、背中をぶつけ合った。

「アゲっ——ぐうう……」

強い衝撃を受けて、不良たちは空中で気絶。そのままユルユルと地面に落ちてきた。気絶したまま重なり合う非行少年たち。

対して一年生は、何だかよくわからないまま、慌ててその場から逃げ出した。

そんな現場を、植え込みの影から見つめている少女が一人。緊張した表情は、燐とした美しさと輝いている。

少女はずっと、親指と人差し指と中指をピンと伸ばした右掌を、現場に向けていた。

「ふう……これで大丈夫よね」

そう一息つくくと、掌を下ろし、緊張した表情がホッと緩む。

セミロングの艶やかな黒髪が風に靡く、愛崎亜美。この学園の一年生だ。

大きな瞳はややつリ目がちで、陽光を受けてキラキラと眩しい。細いけれど高く通った鼻筋と、小さくプクンと柔らかそうなツヤツヤ唇。

瞳の色が少しだけ青緑色で、少女の家系に外国の血が入っている事を現していた。

身長は平均的だけど、ブレザーの隠せない起伏から、平均以上に恵まれたプロポーショナルが見て取れる。ギリギリな丈のミニスカートは、ちよつとでも風に靡くと、ムチムチのヒップとそれを優しく包む純白のショーツを、簡単に露わにしてしまうだろう。

愛らしくも年相応の清潔感と、神秘的で美しい容姿は、北欧系の雰囲気も感じさせる。不思議な現象を起こしてカツアゲ事件を未然に防いだのは、この少女、亜美だった。

「ま、じきにあの二人は、目を覚ますわね」

周囲をキョロキョロと見回して、誰もいない事を確認。脚元に蟻がいたのに気がついたので、ちよつと下がってからもう一度周囲を確かめた。

「えへ、楽しちゃお！」

ペロつと可愛い舌を出すと、頭の横で、右掌の指を伸ばす。

「私の部屋まで、テレポート！」

自分の頭にピつと指先を向けた次の瞬間、少女の姿は植え込みから消失していた――。

共働きの両親と三人家族の亜美は、夕食を済ませてお風呂に入る。

「お風呂、お風呂♪」

鼻歌交じりで全てを脱ぎ捨て、全裸の少女は浴室へ。温かい湯をシャワーで浴びると、気持ち良くてご機嫌になった。

「きゃ〜、暖か〜い」

制服の上では締め付けによって「標準よりも恵まれた」くらいの大きさだった双乳は、解放された途端に、本来の豊乳へとサイズアップ。

ツンと上を向いた乳房先端の媚突は、明るく清潔な桃色で温かい湯を健気に弾く。丸くて白いツルツルの肌は、シャワーの湯をなめらかに滑らせて濡れていた。

柔乳の重そうな肌曲面を滑り、か弱く細いウエストを下り、年頃より豊かな広いヒップへと溢れてゆく。

背筋から尾てい骨の僅かな膨らみを濡らして、媚尻の谷間へと注がれるシャワー。

縦長のおへソから締まった下腹部、更にツルツルな恥丘を過ぎると、処女色の割れ目が湯を浴びていた。

乙女の桃色で息づく肉割れは清楚にピタリと閉じられていて、キスどころか手繋ぎやデートすら未経験な亜美の、清潔感を見せ付けている。

前後の肉谷からパツパツの腿、細いヒザから更に絞られる足首へと、全身がシャワーで愛撫されてゆく。

その姿は、まるで西洋の神話で描かれる水の妖精の如く。

「ふはっ、あゝサッパリ！」

しかも天然で明るい少女だから、男子たちの熱視線もハンパではない。なのに亜美自身が未だにデートすら未経験なのは、現在、別の事に熱心すぎるからだだった。

黒髪を濡らして、少女はシャンプーのボトルへと、伸ばした指先を向ける。

「シャンプーボトル、おいで」

途端に、ボトルがフワフワと宙を舞い、サイキック少女の手元へとやって来た。

洗浄液を頭に一吹きすると、両掌でワシワシと洗う。下向きで質量を増した豊乳が、腕の動きに合わせて細かく上下に震えていた。

現在、サイキッカー亜美が使用できる超能力は三種類。

帰宅した時のテレポーション。シャンプーボトルを呼び寄せたテレキネシス。そして校舎裏の事件を感じ取ったテレパシーだ。

放課後になって帰宅しようとした少女は、校舎裏から強烈な精神悲鳴を、テレパシーが勝手にキャッチ。急いで駆けつけると、一年生が不良三年生のカツアゲに遭っていた。

不良たちが殴りかかる瞬間、テレキネシスで掌も触れずに不良たちを操り、空中で衝突させて事件解決。

そしてテレポートで帰宅したのだ。

シャンプーとリンスの後、石けんを泡立てて全身を包む。

フワフワのシャボンに撫でられる乳房がツヤつと輝く。濡れた肌を滑る泡が、ヒップの谷間を這い降りて、薄いカフェオレ色の肛門に到達。

極細のしわを集めて窄まる媚肛は、プクんと息づいて、ツルツルの会陰まで泡をこぼす。乳房から細い腹部、下腹部から割れ目へと降りていく白い泡。

未だ純潔の少女は躊躇いがちに、処処に優しく右掌の中指を這わせてユックリと粘膜を洗い、左の指で丁寧に後孔を洗浄。お婆ちゃんの教えで、掌で身体を洗う少女なのだ。

だから肌は、しっとりツルツル。全身の泡をサッパリと洗い流して、湯船に浸かる。細い肩まで湯に沈むと、心がノンビリと解放されてゆく心地よさ。

「ああ……極楽だわあ……」

亜美が超能力に目覚めたのは、もう一年ほど前の事だ。

中等科最後の春休み、田舎に住んでいるお婆ちゃんが尋ねてきた。一週間ほど滞在の間、お婆ちゃん大好きな少女は毎日一緒に過ごす。

お婆ちゃんは帰る時、亜美にだけコッソリと、お菓子の箱を手渡した。

『亜美の身に不思議な事が起こったら、この箱を開けてごらんなさい。きっと……あなたの役に立ちますよ』

その年の夏休み。猛暑の日に自室のエアコンが故障。余りの暑さに「海に行きたい」と

か想像しつつ掌で顔を扇いだら、次の瞬間、庭にテレポートしていた。

そしてその夜、お婆ちゃんが他界。

お葬式が済んでから、お婆ちゃんのくれたお菓子箱を開ける。と、中には一冊の古いノートと、数冊の日記が収められていた。

五十年前の日付から始まるノートには、当時、亜美と同じくらいの年齢だったお婆ちゃんが、超能力に目覚めた事が書かれていた。

幼なじみで年上の秀才大学生と一緒に、秘密で超能力を研究し、訓練し、使いこなせるようになるまでの日々の過程が、詳細に記録。

そして日記には、自身が超能力者である事を隠し、人知れず災難から人々を護っていた事が記されていた。

「お婆ちゃんが……こんな事を……！」

そして日記の冒頭には。

『人智を越えた力は、時に人々に恐れられる。だけどきつと、神様が下さったのだ。私は、この力を人々の為に役立てる義務と、大きな責任があるのだ』

「……おばあちゃん……」

子供の頃からお婆ちゃんが大好きだった少女の心に、ズンッと深く響いた。

そして密かに超能力を研究し、理解し、磨き、随分と使いこなせるようになった、サイ

キッカー亜美。

湯船に浸かりながら、窓から覗く満月を見上げる。

優しい月光は、まるでお婆ちゃんが自分を見守ってくれているかのようだ。

無意識に、お婆ちゃんに近寄るように、少女は立ち上がる。全裸の肢体を幾筋ものお湯が流れ、乳房の下から、割れ目から、ポタポタと滴る。

「お婆ちゃん。私もサイキッカーとして、この力をみんなの役に立てるからね！」

優しい少女は、いまもあの日の誓いを胸に秘め、人知れずサイキッカーとしてみんなを護っているのだった——。

平温な数日が過ぎた、ある日の放課後。友達と一緒に公園でクレープを食べながら、日曜日にプールに行く相談をしていた亜美は、強烈な精神悲鳴を感じ取った。

（——っ！ 誰かが事件に巻き込まれている！）

「？ どしたの亜美」

「ごつごめんっ、ちよつと用事を思い出しちゃった！」

ハテナ顔の友達を残し、走って角を曲がると人のいない事を確認。テレポートをした。

そして——。

ブレザー制服のまま、事件の現場へと向かってテレポートをした、サイキッカー亜美。悲鳴を辿ってやって来たのは、町外れに佇む、古い大きな倉庫だった。

「ここって……たしか昔、特撮とかに使ってたスタジオじゃなかったかしら」

壁に囲まれた広い敷地内で、廃屋となった古いスタジオ。

全体が白くて四階建てで、入り口は大きく左右開き。正面と小さな裏口の他に出入り口はなく、窓もない。

代わりというか、壁には何か所もの大きな換気扇が設置されていて、裏口付近には三階分の、非常用階段も外付けされていた。入り口の近くには、大型のワゴンが二台停車。

ツタが絡まる汚れた壁や、転がる廃材、雑草が伸び放題の駐車場。廃棄されて久しいこのスタジオの中から、いまでも強烈な精神悲鳴が聞こえている。

「悲鳴の発信者は…女性だわ！」

どんな事件が起こっているのか。被害者は一人なのか。犯人がいるとしたら何人くらいなのか。中の様子がわからないから、真つ正面から乗り込むわけにもゆかない。

「こういう時、透視能力とかあると便利なのに」

とにかく中の様子を調べなければ。

非常階段は、二階と三階に踊り場があつて、小さいけれど扉もある。

「そうだ。あの扉のすぐ中とかだったら、何か足場があるはずだわ！」

「やめ、てようっ——んくく…っ！」

勝手に吐息が漏れる頃には、全身が恥ずかしい熱を帯びていた。処女の本能でヒザを閉じようとして、しかし開脚させられたヒップが弱々しく揺れる。

制服の上からの感触を楽しんだライダーの男が、次の楽しみに移行。
「さあて、処女の下着を拝見と行かっただ」

亜美が「えっ!？」と思つた直後、力強い男の手で、制服の胸部が左右に開かれた。シャツのボタンが弾けて、羞恥に染まった白い肌と、純白のブラが露わにされる。

「ひやああっ——こっ、このヘンタイいゝっ！」

左右カップの間に小さなりボンの付いた、オーソドックスで可愛い下着。いかにも処女的だと連想されるのである。うしろに、男たちが笑つた。

「おおおおっ！　こんなお子様ブラ、久しぶりに拝んだっすねっ！」

「とっくに絶滅してたかと思つてたダナ、へへへッ！」

バカにされて悔しい。なんて思う余裕すらないほど、亜美は動転している。

乳房揉みの全身を映していたカメラが寄つてくると、紅葉する愛顔と、はだけて剥き出しのブラを、交互に撮影されてしまった。

「バカ映さないでっ——やだあつ——掌つ、離してようっ——っひやうううっ！」

抗議したら、下着ごと持ち上げられてタツプリと揉まれる。カップの中ではスベスベの

裏地と乳首が擦れて、心臓から背筋までが、鋭い甘電でピリリッと痺れた。

上半身を責められ続けて、少しずつ全身の力が抜かれてゆく。必死に閉じようとしていた腿が、痺れるように脱力をして、より大きく開いてしまう。

そしてランジェリーの完全露出を更に越える危機的な恥辱が、少女に訪れた。

「おおつと、いいモノ見つけ、ですぜっ！」

亜美のカバンを勝手に探った手下の一人が、生徒手帳を見つけたのだ。

「なっ、何してるのよっ——っ！」

「オラオラッ、そいつは丁度いいってんだ。おいってんだっ！」

処女のカップ双乳を揉み遊びながら、カエルに似たりダーが命令すると、手帳を手にした痩せ男がカメラの前に手を伸ばす。

そして生徒手帳がフレームインすると同時に、純白のブラが、ブチリッと左右に引き千切られた。

「ひいっ——っ!？」

解放された瞬間、豊かな白い乳房が左右揃って露出。少女の豊乳が生まれて初めて、私たちの視線に晒されてしまった。

イヤらしいチンピラたちが楽しそうに、股間から双乳を通って媚顔へのカメラワークと言葉で、辱めてくる。

「赤葉台学園高等科 一年B組 愛崎亜美ちゃんです」

「クラスメイトの男子たちが、亜美のオッパイ見てる？ つか。カハハハッ」

「やっ——やめてようっ……！」

露出させられた乳房の先端では、桃色の小さな乳首がツンと上を向いていた。白い乳肌は柔らかさを魅せつけるように、艶々でタップ。タップ。

下着だけでなく、乳房と愛顔と、更に学校や名前まで、カメラに収められてしまう。余りの恥ずかしさに逸らそうとした媚顔も、左右から頬を撮られて正面に向かされる。

羞恥する顔から胸をアップで撮られると、リーダーの両掌で剥き出しの乳房を丹念に、柔変形させられて揉み遊ばれた。

穢れた男の掌で直に触れられると、背筋がゾッと怖じける。なのに肢体は、女慣れした男の愛撫を受け入れさせられ、容赦無く蕩けさせられてゆく。

おぞましい愛撫なのに、心臓がドキドキと高鳴つてしまう。全身が熱でボクッとなる感覚に包まれて、身体どころか意識までが、脱力させられてゆく。

（なんとかつ……何とか、しないと……っ！）

焦燥する理性で必死に逃れようとする亜美の耳に、男の恐ろしい言葉が響いた。

「オラオラッ、オッパイの次はマ○コのご開帳だつてんだっ！」

両掌を背中で拘束されて全身をテグスで吊られたまま、サイキッカーの亜美は男の手か

ら逃れようと、必死に身体をよじった。

「こ、このまま、裸にされるなんて……っ！」

制服をはだけて露出させられた豊乳が、揺する肢体に合わせて左右にプルプルと弾んで揺れる。

開脚させられた両脚を閉じようと、細くて艶々な内腿が弱々しい力みを見せていた。

スカートが捲かれて、純白の下着が丸見えの股間。美脚の付け根が、羞恥で薄く上気していた。

背後から愛撫をしてくる、カエルみたいなりーダーの太い指で、敏感な内腿の皮膚薄い箇所、ショーツのフチ辺りをスリスリされる。

「ひい……っ——さっ、触らないでよっ！」

見ず知らずの、それも女性を辱めて撮影している男なんかに触られると、嫌悪感で背筋がゾクゾク寒くなる。しかも取り巻く男たちにも、露出の下着をジックリと視姦責め。

なのに同時に、慣れた優しいタッチで秘処の間近を撫でられてしまうと、腰の最奥がキウウンつと熱を帯びてしまった。

「オラオラッ、女つてなあ心がイヤがつても、身体は素直なモンだつてんだっ！」

触れるか触れないかの男指が、下着のフチからムッチリ膨らむ処女の丘へと這い進む。

生地の上から、左右の処女肉をナデナデされる。そして閉じられた割れ目に指を食い込

まされると、スリリ…と上下に撫でられた。

それだけで背筋全体が、乙女の危機感で強烈に痺れる。

「は、離しっ——はやああっ！」

乳房愛撫で肉体の力が抜けていて、閉じたい脚が閉じられない。

性的危機と恥ずかしさで理性が混乱しているのに、女の身体は男の導きに対して恐れながらも素直に従い、知らない肉体感覚を目覚めさせられてゆく。

一瞬でも早くここから逃げ出したいのに、気怠い性熱で包まれた身体は、全く力が入らない。勝手に身体に触れられて怖くて嫌なのに、心臓がトクトクと早まって、強制的に、意識にモヤがかけられてしまう。

自分の身体が、自分のものじゃなくされてゆく——。

それが、怖い。

そんな処女独特の反応が楽しい、カエルフェイスのリーダー。

「ゲッゲッゲッ、怖いかってんだ？ 処女なんて久しぶりのエモノだあ、ジックリと楽しんでやるってんだっ！」

そう笑われると、純白ショーツの上下を摘まれて、細い生地を媚肉のスリットに食い込まれる。

開脚の正面から映すカメラには、極細の布で肉のスリットだけが隠されたギリギリシヨ

ット。剥かれた左右のムチムチ処女肉は、上気して艶を帯びていた。

正面から少しでも横に回られてしまうと、無毛の処女丘や艶々の会陰、色素の薄い肛門までが、バッチリと見られてしまう。

限界ギリギリな露出に、心臓がドキュつと跳ねて、意識は更に混乱。

「やっやっ、やだああっ！」

「すぐによくしてやるってんだ」

耳元で余裕の宣言をされると、食い込まされた極細なショーツで、処女の筋に合わせて上下摩擦をされ始めた。

——スリリ、スリリ…スリスリスリ…。

「はひっ——やめ、やめてやめてよっ——んっあっあっあうんくくっ！」

生地の触れ方そのものは、相変わらずの女慣れした、触れるか触れないかの優しさ。

しかし伸ばされて堅くなったショーツは意外とザラザラで、未だ自分の指しか知らない処女粘膜には結構な刺激だ。

敏感な処女をユックリと、しかしリズムミカルに愛撫される。亜美の腰が震え、粘膜全体がジンジンと甘く痺れた。

性処女からの甘電に呼応するかのよう、胎内でも強い性熱が湧き起こされる。まるで処女全体から膈壁を通して、子宮までもが愛撫されてしまっている感覚だった。

「い、いやよっ——は……はああああ……っ！」

割れ目から子宮までの女性器全体が性感責めにされると、息が乱れて濡れた艶が含まれてゆく。

ヒップや豊乳が霧状の汗を纏って、キラキラと艶めく。先端の媚突は桃色を更に強め、不埒な男たちに向かって、自身の性興奮を教えていた。

「身体がつ——んあうっ——へんん……っ！」

脱力して震える細い肢体。大きな瞳の臉が蕩けると、決定的な露出が慣行される。

「オラオラッ、処女のマ〇コ公開だっつてんだっ！」

——ッピリリイッ！

少女が「ひっ?!」と反応したと同時に、純白の生地が遂に、カエルフェイスの怪力で真つ二つに引き裂かれてしまった。

強姦魔な男たちに向かって、乙女の割れ目が公開される。

真つ正面のカメラには、驚愕する制服姿の亜美の媚顔と、双つ豊乳、閉じられた肉と後孔までの、少女の全てが録画されてしまった。

(え——私——全部——こんなのウソ)

人生初な露出の衝撃で、頭がパニック。処女露出から一瞬遅れて、亜美は羞恥の悲鳴を上げていた。

「——いやあああああああうあつ——やつ、やめてえつ——ビデオ止めてええつ！」

「アニキイツ、お顔からマ○コまで、バッチリ撮れましたでさあつ！」

恥ずかしくても泣き叫んでも、正面で固定された媚顔を逸らす事も出来ない。

「オラオラッ、本当のマ○コ公開はこれからだつてんだつ！」

羞恥の表情までアップで撮影されると、更に閉じられた処女肉までもが、男の指で左右に柔らかく掂げられてしまった。

——くちり……。

左右それぞれ三本の指で、割れ目の上端と真ん中と下端を押さえられて、粘膜全体を余すところなく開かれる。

「うひょろっ、綺麗なマ○コがご開帳〜」

「イヤああつ——はひっ——もうやめてえええつ！」

強姦慣れた不埒な指で、清潔な処女がカメラに晒される。肉体愛撫と男たちの視線によつて、恥ずかしそうに上気して、薄く蜜を纏つて濡れていた。

人差し指で包皮を剥かれた肉芽は、根元まで完全露出。極薄い左右の襞は、揃った形で清楚に拙く綻ぶ。

開かれた粘膜全体は、浅い艶々のシワで柔らかさと清潔さを確信させていた。

プツクリと膨れた小さな尿口と、割れ目の下端で息づく膣孔。艶々の会陰を越えた小さ

な菊肛は、細いシワを集めて処女孔と一緒にヒクついている。

男の指が器用に蠢くと、後孔と膣孔が更に横伸ばしでムニリと掀げられた。

男たちやカメラには、朱い腸壁と朱い膣壁。そして膣入り口のちよつと奥、浅いところで小さな孔に見える処女膜までもが、ハッキリと晒されてしまった。

柔秘処の全てが濃い桃色で息づいていて、全体がシットリと薄い蜜に纏われている。

「オラオラッ、滅多に見られない処女膜だつてんだっ！」

「これが処女膜ですかいつ、オイラ初めて見ましたぜっ！」

「ツヤツヤしてて綺麗なモンだナあ、ウヒヒヒヒッ！」

下卑た男たちの笑い声に、少女の心がヘシ折られてゆく。

（みっ——見られてるっ——私っ、全部見られてっ——っ！）

開脚拘束で乱れた制服。捲れ上がったスカートの上に自身の学生手帳を置かれると、はだけた全身と学生証明書が、一枚画として映される。

「は〜い亜美ちゃん、スマイルスマイル〜」

ニヤニヤするカメラの男によつて、羞恥にむせぶ少女の愛顔から豊かな双乳、開脚公開される処女性器までが、何度も往復されてアップで撮影。

こんなビデオをもし見られてしまったら、いずれ世間の人たちみんなに、亜美の学校から素性までの全てが知れ渡つてしまう。

「やっ——やめてえっ……こんなっ——あひうっ！」

背後抱きのリーダーに豊乳を揉み遊ばれながら、開かれた秘処の粘膜を直接タッチ。それだけで、処女から子宮までがズクンつと鋭い甘電に抜けられ、思わず声が裏返った。

「オラオラッ、いい声出すじゃねえか。これなら売り上げトップを狙えるってんだ」

全く嬉しくない言葉をかけられながら、男の太い指で肉芽を挟まれて転がされ、更に粘膜全体と尿口と膣孔を、指先で優しく連打されてナデナデされる。

「イヤっ——っうあああああつ——ひやめてっ……はあ、はああん……っ！」

柔軟で濡れた粘膜を指愛撫されて、過敏な濡れクリトリスと姫粘膜全体を撫で刺激されると、子宮から脳裏までの肉體中心を直接に甘責めされるような、鋭くて強い愛撫性感。

肉體だけでなく、意識までもが一方的に蕩けさせられてしまう。聖宮が未知の強い飢餓感に目覚めさせられて、オナニーでは感じなかつた強烈な欲求を教えられてゆく。

「はあっ、はあああああああつ——身体っ、カララあつ——あたまもっ——へ、へんにつ、なつちやううっ！」

女體の性感に理性が押さえつけられて、もつと快感を教えて欲しいと望んでしまう。捕らえた愛らしい少女の抵抗が失われると、男たちから恐ろしい欲求を教えられた。

「アニキが処女強姦したら、オレたちにも輪姦させて下さいよおっ！」

言いながら、男たちはズボンを脱衣しようと、ベルトに手を伸ばす。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>